2025.5.24　大学　スプリングフォーラム

題字・河井道
2025年度　第2号
2025年7月15日発行

河井道と恵泉の「宝」

理事長・学園長　廣瀬　薫

今年恵泉女学園は九六周年です。四年後に百周年の大きな節目を迎える大切な時を、皆様とご一緒に歴史を創りつつ歩めることを感謝しています。

『スライディング・ドア』を読むと、河井道先生がいかに寄付金集めに心を砕いていたかがよくわかります。河井先生は、戦争末期に「園芸専門のカレッジを敢えて創始する」という極めて大胆な決断をした時、文部省の担当者から「いったい、資金はあるんですか」と問われて、「ございません」と答えています。続けて、「だったら、あなたがもっているのはどういうものなのです」との質問に、「希望と信念と熱意のほかは何もありません。向こう気と呼んでくださってもかまいません」と返答しました。その後、資金集めに奔走した河井先生は、「私たちは三十万円という目標の金額を集めることができたのであった」と書き、それを「イエスが五千人の群衆を養われた、あのパンの奇蹟を思い起こしていただきたい」と、聖書の奇蹟の記録に重ねて記しています。今の金額への換算は難しいですが、三億円位かと想像します。国内外の支援者からの大口もあったでしょうけれども、多くは小口の献金の積み重ねによって、常識的には無謀な必要が満たされたのです。

戦後の短期大学設立に関して河井先生は、「恵泉はこうした莫大な財政的負担を恐れずに、日本の友人たちの間で大規模のキャンペーンを行っており、目標に到達すべく最大の努力をするだろう。私たちには金銀はない（筆者注：これも聖書の言葉です）が、私たちの宝として卒業生を、また学生を、示すことができる。彼女たちの真摯さと勤勉さは霊的にも、物質的にも、母校のために奇蹟を起こすであろう」と書いています。この文章は資金集めの鍵を記しています。河井先生と恵泉女学園の「宝」としての「卒業生と学生生徒」が鍵なのです。この「宝」が、恵泉の九六年を支えるいかに大きな力であったかを思います。当時河井先生と恵泉を支えた人たちは、犠牲を払うだけでなく志を共にすることで大きな喜びを経験していたであろうことも想像されます。

今、「創立百周年」に向けてのプロジェクトが進んでいます。大きな費用を要する「フェロシップホールの建て替え」は、基本的な設計案ができました。メディアセンターと共に新しいシンボルができ、恵泉の未来を拓く百周年を迎えたいと願っております。けれども、ニュースに報じられるように人手不足と建築費の高騰で外部環境は大逆風です。最善の実施案を求めて歩みを進めています。ぜひお祈りとご支援をお願いいたします。

「創立百周年記念事業募金」の趣意書をぜひご覧ください。目標額は三億円です。一口五千円で、税法上の優遇措置もありますので、この機会にできるだけ多くの皆様がご協力くださいますよう、心よりお願いいたします。既に続々と応答を頂き、感謝しています。一言添えてくださる方も多く、恵泉で過ごしたことがいかに良かったか、今の時代に恵泉の教育がいかに必要かを書いてくださるのを読んで、とても励まされています。募金は額を集めるのが目的だと思うかも知れませんが、実際には「参加者数」が重要です。額にこだわらず、一人でも多くの方のご参加をお願いいたします。三億円は、例えば、同窓生の皆様が毎年一万円ご寄付くだされば、早期に達成できる目標額です。

皆様の中には、新ホールは自分には関係ないかもしれない、と思われる方があるかも知れません。そう思う方は、ぜひ恵泉の歴史に思いを馳せてみてください。今ある素晴らしいメディアセンターも校舎もその他の施設も皆、過去の人々が、苦労して作り上げたものです。それを今私たちは、当然のように活用しています。施設のハード面と共に教育理念や建学の精神などのソフト面も、先人たちが苦労に苦労を重ねて積み上げてきたものです。各世代はその時々に、その恩恵にあずかって学園生活を送るのです。ならば、それぞれの世代の当然の務めとして、次の世代のために、できる限りの良いものを用意しておきたいと思います。そのようにして、世代間の連帯が受け継がれ、恵泉の「恵み」の「泉」の歴史がつながっていきます。それが、伝統ある学校の姿なのだと受け止めてくださると嬉しいです。

『スライディング・ドア』の終わり近くに、河井先生は次のように書いています。「この本が出版されるころには、恵泉は少額（一口二十円）の寄付を乞う手紙を何千通も送ることによって、あらたな財政的キャンペーンに乗り出していることだろう」。恵泉の今と未来の「宝」を活かし、互いを活かし合うお祈りとご支援にご参加くださいますよう、重ねてお願いいたします。